第三者意見

ミネベアグループCSRレポートを拝読して

株式会社日本政策投資銀行
環境・CSR部長
竹ケ原 啓介氏

ミネベアグループCSRレポート2014は、基本理念である「真摯なものづくり」を、根幹を支えるヒトを基軸にとらえつつ、技術力とグローバル展開の両面から掘り下げ、新中期事業計画の策定という節目にふさわしい強いメッセージを発しています。

まず印象的なのが特集です。経営の基本方針「五つの心得」を実践している国内従業員の皆さんの生の声を丹念に拾い上げた特集1では、高い志と多様かつ密接なコミュニケーションを介して、貴社の強さを支える技術が伝承される様子が生き生きと伝わってきます。東京研究開発センターを巻頭に配し、「TRDCのミッション」として研究開発活動の戦略を明記した先駆性と相俟って技術力という軸が明確に打ち出されています。また、グローバル展開を扱う特集2、3では、「真摯なものづくり」を定着させていく経過が印象的に示されています。従業員とともに成長していくというメッセージは、これまで振り返りの中で紹介されることが多かったのですが、今回は、学校教育の機会提供から始まる人材育成というカンボジアにおける現在進行形の取り組みと対置することにより、到達点であるNMBミネベアタイの水準が際立ち、グローバルという軸からみた「真摯なものづくり」のイメージが膨らみます。

続くCSRの各側面についても、現状分析にISO26000のフレームワークを適用するなど、グローバル展開を一段と意識した工夫がうかがえます。社会面では、これまでの体系を踏襲しつつ、テーマごとに重み付けが加えられたことで読みやすくなりました。今号では特集を受けて従業員に関する記述が充実しましたが、これと並んで印象的だったのが、取引先企業との関係です。これまでの報告でも取引先とのダイアログ、「CSR調達ガイドライン」などが紹介されてきましたが、今回のCSRアンケート調査の実施により、取引先企業とのコミュニケーションを重視する姿勢が一段と明確になりました。また、環境面でも、大幅な増収にもかかわらずエネルギー投入量などの削減を実現するなど、高度な環境管理の成果に加え、製品を通じた環境への貢献を強く意識した貴社らしさも維持されており、貴社の環境経営のエッセンスを分かりやすく伝えてくれています。

強化されたWebとの棲み分けも含めて、今号は、グローバル企業のCSRレポートと銘打つにふさわしい内容を備えた優れた報告に仕上がっています。加えて、トップコミットメントで新たに提示された「5本の矢」戦略により、次の段階への布石が早くも提示されている点は、今後を展望するうえで特筆すべき点です。この戦略は、貴社の成長と社会で実現する価値を体現したもの、いわば貴社のCSRにおける重点項目（マテリアリティ）を示したものととらえることができます。今後は、この「5本の矢」に則して具体的な取り組みを位置づけ、KPI※の設定・検証などを通じて、文字通り本業と同期したCSR像として展開していくものと期待されます。次なる展開を楽しみにしております。

※KPI：Key Performance Indicator（重要業績評価指標）

竹ケ原 啓介氏

一橋大学法学部卒業後、日本開発銀行（現株式会社日本政策投資銀行）に入行。調査部や政策企画部、フランクフルト首席駐在員などを経て、現職。その他、環境省「環境格付融資に関する課題等検討会」委員、「環境成長エンジン研究会」委員、内閣官房「環境未来都市推進委員会」委員、内閣府「環境未来都市推進ボード実施推進会議」委員などを務める。

第三者意見をいただいて

常務執行役員
財務・コンプライアンス推進部門
CSR推進室、コンプライアンス推進室担当
松田 達夫

竹ケ原様には本年度も大変貴重なご意見を賜りありがとうございます。

本年度のCSRレポートでは、当社グループを支える従業員をお伝えすべく、従業員自らのCSR実践と重要なステークホルダーである従業員に対する取り組みを紹介した3つの特集記事を掲載しました。また、Hot Topicsとして「東京研究開発センターの設立」では研究開発活動戦略を、「CSR調達アンケート調査の実施」にてお取引先様とのコミュニケーションを報告しました。これらを高く評価いただきましたことを励みに、今後さらにCSR活動に対する取り組みの充実を図ってまいります。

今回ご指摘いただきました本業と同期したCSR像の展開につきましては、今後も各ステークホルダーとのコミュニケーションを継続し、重要課題を抽出しながら、優先順位付けを行った上で、進めてまいります。

また2013年度CSR目標の中には未達成のものがあり、2014年度の課題として認識しております。引き続きCSR活動の改善を図り、前向きに取り組みを進めてまいります。